

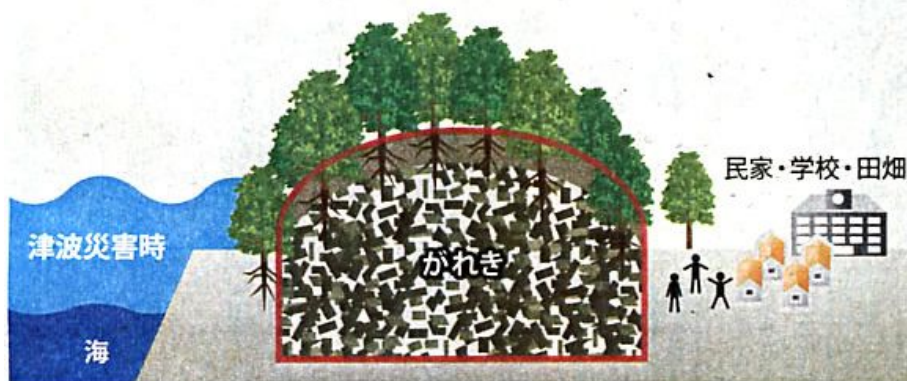
がれきや破材を活用した盛り土の上に森を作り、津波を減衰させる「森の防波堤」構想が動き出した。国は海岸防災林づくりへの導入を決定し、東日本大震災の被災地では、計画づくりに着手した自治体もある。巨大地震による津波が想定される中部地方では、部品工場が実験植樹に踏み切るなど津波対策で「森の力」を再評価する動きが広がっている。

【山本悟】

森の防波堤構想は震災直後、宮脇昭・横浜国立大名誉教授が提案した。宮脇さんによると、埋めたがれきの隙間に樹木の根が絡み

民家・学校・田畑

「森の防波堤」の概念図



津波災害時
海

「森の防波堤」再評価

被災地自治体など計画

防ぐ。

林野庁の検討会では高さ3層の津波を想定した場合、林幅50層で津波の水流圧力はほぼ半減し、100層では3分の1に低減されたとの予測データが示された。

今回の津波被災地では、漁船や車、コンクリート片などの漂流物が林の中にとどまり、背後の住宅地を直撃するのを防いだ例が数多く報告された。いずれも平地の海岸林での事例で、「盛り土した森の場合は、さらに津波を弱める効果は高まる（同庁治山課）」という。

野田佳彦首相は4月23日、がれき処理促進と津波対策の両面で防災林を整備する方針を表明した。

また、福島県南相馬市の計画では、市民が海に親しむ一方で異変にも気付くよう工夫を凝らす。海岸側に整備するコンクリート防波堤の内陸側に、がれきを活用してそれより高く盛り土した森を公園として整備する。林幅は200層程度を考えており、昨年末の復興計画に盛り込んだ。9月にまとめる整備計画で具体化する。

なく、防災意識を後世に伝えることや、市民が憩える公園としての役割もある。

森の防波堤にいち早く反応したのは、南海トラフの巨大地震津波を警戒する中部地方の企業だ。内閣府の検討会の発表で最大20・5層の津波が予想される愛知県豊橋市の三河湾埋立地に工場を持つ自動車部品メーカーの三五（本社・同県みよし市）は4月22日、実験植樹をした。宮脇さんが指導し、東海地区に工場を持つ複数の企業も参加した。

工場の南端に全長300m、高さ1・2層の土器を整備。中に工場内のコンクリート片を中心に部品運搬用の木枠など約30tを入れ、土盛りした上に常緑広葉樹5760本を総勢400人で植えた。環境省は実験として木質材を入れるのは認めており、同社では毎月、メタンガス濃度や陥没の状況などを調べる。

また、13・7層の津波が予想される静岡県掛川市でも、海岸近くの特別養護老人ホームで施設内のコンクリート塊を活用し、地元NPOが森の防波堤をつくる予定だ。

津波最大20.5層予想 常緑広葉樹5760本を植樹



震災で大量に発生したがれき。南相馬市も有効活用して、森の防波堤づくりに取り組む。福島県南相馬市の沿岸部で昨年11月、山本撮影。